

浅間山麓の草原と希少生物 ～歴史と現状～

生物多様性班 須賀 丈

明治時代の写真家、日下部金兵衛が撮影した浅間山の写真には、今の軽井沢一帯に広大な草地や湿地が広がっていた様子が写っています。現在この付近は、駅や商業施設、カラマツの植えられた別荘地などになっています。また地元の方からの聞き取りや寄稿文を集めた軽井沢サクラソウ会議の冊子には、オキナグサ、キキョウなどの咲く採草地やサクラソウの咲く湿地の広がる昭和前半の軽井沢の様子が描かれています。ではこれらよりも古い時代にはどうだったのでしょうか。

オキナグサやサクラソウなど、人が適度に利用することで保たれてきた草地（半自然草原）や湿地の植物の多くは、寒冷な氷期に大陸から日本列島に入り込んだと考えられています。温暖な後氷期（約1万年前～）には、河川の氾濫や火入れ・放牧・採草などの人間活動が生育環境を維持してきました。



浅間山麓の半自然草原

最終氷期の2万6千年前頃、火山活動をしていた黒斑山が山体崩壊を起こしました。それによって湯川がせきとめられ、南軽井沢に湖が、またその周辺に湿地ができたとされています。

後氷期の幕開けは縄文時代です。浅間山麓とその周辺には、茂沢南石堂遺跡など多くの縄文遺跡があります。火の使用をともなう草原の利用はこの時代からつづいてきた可能性があります。その手がかりとなるのが、浅間山麓に広く見られる黒ボク土という黒い土

です。黒ボク土は長く草原のつづいた場所にできます。また各地で縄文の頃から生成がはじまり、細かい炭を多く含みます。このことから、人間の火の使用が黒ボク土の生成に関係しているのではないかと疑われています。浅間山麓以外でも、八ヶ岳山麓や関東平野の台地など、縄文遺跡の密集地には黒ボク土が見られます。



軽井沢の黒ボク土

古墳時代には馬の飼育技術が渡来人の手で日本列島に持ちこまれました。佐久地方の古墳からも馬の骨や馬具が出土します。馬の飼育には広い草地が必要です。平安時代には、朝廷に貢馬するための御牧とよばれる放牧地（長倉牧・塩野牧・新治牧・望月牧）が浅間山麓から佐久地方一帯にありました。軽井沢の長倉牧は室町時代にも牧として利用されていたとされています。近世の浅間山麓には中山道が通り、一帯は馬産地として知られました。カヤ場やヨシ場、秣場などの草地がひろがり、その草の利用をめぐる集落間の争い（山論）も起こりました。

このように浅間山麓の草原は、古くからの人の暮らしに助けられて存在してきました。この一帯に今もわずかに残るオオジシギ（カミナリシギ）やサクラソウ、草原性のチョウなどの希少種は、いわばそのシンボルです。氷期からつづく地域の歴史の語り部として、未来に大切に伝えるべき存在ではないでしょうか。